

(第3種郵便物認可)

# 間取り図で再現、冊子に

宮城県の建築士グループが、東日本大震災の津波で流された住宅を間取り図で再現し、冊子として残す取り組み「記憶の中の住まいプロジェクト」を進めている。被災者への聞き取りを基に家にまつわる思い出も盛り込み、「震災前の暮らしに思いをはせてほしい」と10月に発行する計画だ。

## 東日本大震災 津波で流された住宅



東日本大震災の津波で流された住宅を間取り図で再現した冊子の試作品

沿岸部では土台だけを残して全壊した住宅も多い。県建築士会女性部会の有志らは技能を役立てようと、震災から3年後に被災者への聞き取りを開始。仙台市や石巻市などで、口コミを通じて徐々に依頼する人が増えた。仮設住宅の集会所などを訪ね、間取りや家財道具、庭の植物の配置を図面上に「再現」してきた。

間取り図には、大家族のだらんの場となった広い茶の間や「居久根」と呼ばれる屋敷林を色鮮やかに描く。建物だけでなく、思い入れのある場所には「ベランダで海を見ながら飲むビールがおいしかった」「孫がよく飛び込んで

## 宮城の建築士 被災者の記憶紡ぐ

きた裏口があった」など、住人の暮らしぶりも加えた。当初、間取り図は依頼者にだけ贈っていた。聞き取りを続けてきた1級建築士の西條由紀子さん(72)は「一枚の写真すら手元に残らなかつた被災者に、新たなアルバムにしてほしい」と話す。しかし復興が進み、かつての町の面影が失われつつある中、より多くの手に取って見てもらおうと、冊子での配布を



「記憶の中の住まいプロジェクト」を進める西條由紀子さん(右)と小林淑子さん=7月、仙台市

決めた。公開に応じた26軒分の製作費130万円をクラウドファンディングで8月31日まで募り、約1500部を発行する計画。町の歴史や風習、被災や避難生活の経験談も盛り込み、各地の伝承施設などへ配布する。プロジェクトリーダーの小林淑子さん(59)は「被災者が以前の生活を思い出すきっかけや、新たな震災伝承の形になれば」と意気込んで